

わ

が

街

わ

が

故

郷

旭精工株式会社 大阪支社 「大阪市西区川口とその周辺」

会社紹介

弊社は1928年（昭和3年）5月、大阪府堺市堺区一条通にて、ベアリング製造販売の合弁会社エス・ケイ・アイ ベアリング製作所（商標：SKI）として創業いたしました。その後、1938年（昭和13年）11月に現在の大阪府堺市西区鳳に本社工場を移転し、社名も旭精工株式会社（商標：ASAHI）に変更し現在に至り、昨年で創業80周年を迎えました。

大阪支社は、大阪市西区川口に所在し、関西の営業拠点として事業を展開しております。

この度「わが街わが故郷」ということで当事業所が所在する西区川口とその周辺をご紹介します。

【川口居留地】

幕末の安政五カ国条約によって、大阪は開港が決定されて、1868年、東京・神戸・新潟とともに開港・開市されました。同時に外国人居留地と定められた川口町26区画が欧米諸国に競売が行われ完売し、舗装道路に街路樹や街灯、洋館が建ち並ぶ西洋の街へと変貌していきました。

その後、川口居留地に隣接する本田、富島、古川、梅本町も外国人雑居地となり、1886年にはさらに10区画の増設が行われました。また、木津川対岸には、ドーム型のモダンな西洋建築

の大阪府庁本庁舎と大阪市役所が建設されました。1899年に居留地制度は廃止されますが、大正末期まで周辺一帯は大阪の行政の中心であり、大阪初の電信局、洋食店、中華料理店、カフェなどの飲食店や先端技術の工業製品や嗜好品がこの地から大阪全体に広まりました。まさに当時川口は大阪の文明開化発祥地でありました。

川口が貿易港として現在に至るまで発展しなかったのは、重工業の造船技術発達により船舶の大型化が進み、川口は河口港で水深が浅いため大型船舶が入港できなかったためです。そのため、外国人貿易商は良港を有する神戸居留地へと移住していきました。彼らに代わってキリスト教の宣教師が定住して教会堂を建て布教活動を行い、その一環として病院、学校を設立し経営を行いました。



川口キリスト教会（日本聖公会川口基督教会）

現在の平安女学院、プール学院、大阪女学院、大阪信愛女学院などのミッション系の学校や、聖バルナバ病院はこの地で創設されました。それら施設も周辺地域の社会基盤が整備されるにしたがい、大阪の上町エリア（天王寺区・中央区など）へと移転して、川口はしだいに衰退していったといえます。

それとは対照的に諸外国から続々と大型外国船が入港するようになった神戸港は、1890年代には東洋最大の港へと発展を遂げました。居留地廃止後は川口在住の華僑が進出し、中華街となりました。戦前は、その数三千人を超え、主に飲食店、洋品店、理髪店、貿易業などの商売を行っていました。しかし、日中戦争の激化と同時に多くの人たちは帰国し、後の大阪大空襲で焼け野原となりました。

戦後、華僑の人たちは大阪市内各地に拡散し、川口は倉庫街となりました。現在は、わずかな古いコンクリート建築があるほかは、当時の繁栄の面影は残っておらず、西警察署前の本田小学校の交差点角に小さな「川口居留地跡」の石碑が建っているだけとなりました。



川口居留地跡石碑

【鞆公園】（うつぼこうえん）

その昔、大阪一の規模を誇った魚市場の雑喉場魚市場（ざこぼうおいちば）と鞆塩干魚市場の在った場所で、当時、雑喉場魚市場は大阪湾近海からの鮮魚を扱っており、鞆塩干魚市場は

全国から入る干物などの海産物を主に扱っていたといえます。

後に1931年の大阪市中央卸売市場が開場されるとともに両市場も閉鎖されました。その後、跡地に残った建屋も大阪大空襲の爆撃により焼け野原となり消滅したといえます。

終戦後、3万坪を占領軍が接收し、占領軍の専用飛行場となりました。1952年になり日本との平和条約（サンフランシスコ条約）発効後、大阪市に返還されました。その後、公園として整備され、1955年に9万2000㎡という区内最大の鞆公園となって生まれ変わりました。

なにわ筋を挟みこのような東西に長い形をしているのは飛行機の滑走路の跡地だったからです。公園内の施設としては、バラ園、テニスコート、屋外結婚式場、緑豊かなケヤキ並木道などと充実しており、緑の少ない大阪の近隣住民の憩いの場所となっています。



バラ園



緑豊かな並木道

【町名の由来】

西区には珍しい地名が多くあります。慣れ親しんだ町の名ですが、その由来を調べてみましたので紹介いたします。(西区HP資料引用)

川口 (かわぐち)

この地が安治川と木津川の分流点に位置していることから用いられた通称であることに由来する。『摂津名所図会』には、「河口……河海の喉口にして両所あり。一は安治川という。大川筋・土佐堀・蜷川等の下流なり。一は木津川という。長堀・道頓堀、及び西の方諸流ここに帰会す……。むかしの(川)末の江(口)なり」とあることにもとづく。

阿波座 (あわざ)

古くから阿波(徳島)の商人たちがこの地に住みついて座をつくり商いなどをしていたことに由来する説と、当地が阿波屋(西村)太郎助の所領地であったことからだとする説の二説がある。

立売堀 (たちぼり)

大坂冬の陣・夏の陣の時、伊達家がここに壕を掘り陣地としていたが、その跡を掘り進んで

川としたことから始めは伊達堀(だてぼり・後には、たちぼり)と呼んでいた。その後沿岸で材木の立売(たちうり)が許されたため字は立売堀と改められたが、これを今まで通り「たちぼり」と読ませていた。

鞆 (うつぼ)

豊臣秀吉がある日お供を従えて市中巡視をした際、町で魚商人たちが「やすい、やすい」と威勢のよい掛け声で魚を売っているのを耳にして「やす(矢巢)とは鞆(矢を入れる道具)のことじゃ」と言ったので、その言葉にあやかって鞆という町名がつけられたという。

最後に一言

弊社も永きにわたり西区にて事業所を構えておりますが、今回の執筆にあたり初めて地域の歴史的背景を調べていくと、この地は幕末～明治～大正～昭和と時代の流れとともに変貌を遂げていった街であったことを知り、非常に感慨深いものがありました。

(旭精工株式会社 大阪支社 日下部 正彦)